



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	絵本とことば
Author(s)	古塚, 正恵; 古塚, 孝
Citation	教授学の探究, 4, 19-33
Issue Date	1986-03-28
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/13531">https://hdl.handle.net/2115/13531</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	4_p19-33.pdf



## 絵 本 と こ と ば

古 塚 正 恵  
(札幌市東保健所精神発育相談員)  
古 塚 孝  
(北海道大学教育学部)

私たちにとっての初めての子育ては、心身共に発達の遅れの疑いのある子供をどのように育てていくかという大きな課題でもありました。子育てについてのいくつかの原則をたててアタックすることに致しました。できうる限り普通の子供として扱うこと、知的な遅れを最小限にするために、言語の働きかけを最優先とすること、少なくとも環境要因のハンディはゼロにすること、子供の喜ぶことから始めること、飽きるまで続けることに親がつきあうこと、知的な活動を支える材料を最大限に提供すること等です。

私たちは、乳幼児期における言語を活性化させる方法として「絵本の読みきかせ」を選択しました。人は外界から現象を抽出し、意味をとり出す際、通常はことばを用います。例えば、具体物としてのリンゴは色、形、大きさだけを考えてみても実に広範囲にわたり、これらのものから「リンゴ」という普遍概念を抽出するのは、障害児にとってかなり難しい課題のように思われます。それよりは、具体物からある程度抽出された意味、すなわち絵にかかれた「リンゴ」を理解することが、障害児にとって、リンゴ一般を理解する手助けとなると私たちは仮定いたしました。これらのことは、ごくあたり前のことですが、現状としては臨床心理学的にも一定の位置づけを与えられていません。この小論文を書くにいたった最大の理由はそこにあります。

乳幼児期における「絵本の読みきかせ」は、本を全部順序通りに読む等という必要性は全くありません。娘の場合、3～4歳位までは、特定の場面や表現についてのみ読むことをくり返し要求されました。これは、他児にも多く認められることです。絵本の中のごく一部に強く惹かれるのは、絵そのものに含まれているおもしろさ、また、文章表現そのもののおもしろさ、そして読み手の読み方がおもしろい等の理由が考えられます。娘がくり返し読むことを要求した様々な表現が、その後、一定の時間を経て、ある生活場面との出会いにより、生きた意味をもつことばとして出現したことを私は何度も観察しました。

例えば「さるかに合戦」等の日本昔話の中に「覚悟しろ」という表現が多々認められます。ある日、娘は歯科医院の待合室の中で、母親が「ちゃんと先生に口をあけてみせるのよ」といったことに対し「覚悟はできとる」と答えて、私を驚かせました。また、「3びきのやぎのがらがらどん」の中に、トロールが「誰だ、わしの橋をがたごとさせるやつは」という表現がくり返してできます。娘はお友だちにふざけて背中をどつかれたりした時に、すかさず「誰だわたしの背中をどんだたたくやつは」とどなったものです。

言語は理解される以前に、多くの符号として入力してはじめて、意味ある場面との出会いで、概念としての意味をもつのではないのでしょうか。意味の理解が不十分であっても、言語そのものを入力しておくことこそ最優先であると考えた根拠はこれらにあります。ふんだんに

絵本を利用したことが、娘の言語生活を非常に豊かにし、比較的早い時期に文字への興味を駆り立てたことです。娘のケースが決して特殊なことではないという確証を私は、次に紹介する本で得ることができました。

それはドロシー・バトラー著「クシュラの奇跡—140冊の絵本との日々」です。これは著者の孫娘クシュラに試みた絵本の読みきかせに関するものでかなり重い障害を背負ったクシュラが言語生活面で豊かになっていくプロセスを克明に記録しています。これはニュージーランドのオークランド大学に提出された学位論文でもあります。この著者は自ら、ブックショップを経営し、あらゆる子供の読書指導にあたっております。

更に私がめぐり会ったもう一つの本「ナイジェル・ハントの世界」を紹介したいと思います。これは約20年前に書かれたものでイギリスのダウン氏症の青年が17～18歳の時に、自らの経験をタイプに打って著わしたものです。当時としては、特に知恵おくれの疑いのある青年が自らのことを文字に記すこと自体が驚異であったようです。文章表現そのものは幼い印象もうけますが、比較的正確に記述されているにはびっくりさせられました。

観点は異なりますが、子供向けの本で、スウェーデンのトビアス君に関するシリーズがあります。これはダウン氏症のトビアス君をとりまく家族が書いた本で、特に兄や姉が、弟のトビアスといっしょに生きることがとても大切であることを子供の眼で素直にかいていることに私は好感をもちました。

このような本に出会うと、日本の学校教育の渦中にある娘のことを思わざるを得ません。日本の学校教育も「道徳」という頭でっかちの知識だけの「仲よくしまししょう」を教えるよりも、より実践的な障害児との共存の道を考える方が、有効なところの教育をはかることになるでしょうに！

娘のケースや今まで紹介した本を通して言えることは、障害児も十分に本を楽しめること、かなりの知的成長が期待されることです。障害児教育の一般論は成り立ちにくいとされていますが、多くの典型例の積み重ねの上で、あるパラメーターを見つけ出すことは可能ではないかと私は考えます。個々の障害児の日常生活の中にその子にとって有効に利用できる素材がひそんでいるのではないのでしょうか。それを注意深く見つけ、実践するのが親であり専門家である人々の役割と考えます。

さて、先に紹介したドロシー・バトラー夫人が、最近来日されましたが、遠方のことなので私は講演をきくことができませんでした。しかし、バトラー夫人の通訳で、しかも「クシュラの奇跡」の訳者でもある百々佑利子さんが来札され、その後のクシュラとそれをとりまく状況についてのお話を伺うことができました。この中のお話の一つに、クシュラの母親であるパトリシア夫人の子育てにあたっての生活原則に触れている部分がありました。これは、私共が娘を育てる時に決心したことと同じことなので、あえて紹介したいと思います。

- ① 生活していく上の優先順位…子供の成長にかかわることを最優先とする。
- ② 健常者と障害者への平等な理解。
- ③ 社会とのかかわり…親が子供に与えられるものは、生きていくための強い信念である。親自身が社会とのかかわりの中で、逃げ出さずに、前向きに生きることである。

クシュラは、現在、中学生で両親、妹、祖母の協力の下でめざましい成長をとげているようで、私も今後の彼女の成長のプロセスに注目していきたいと思っております。

さて、次に娘の成長の概要を紹介したいと思います。娘は昭和51年11月17日出生。満期産でしたが、2,400gの低体重児で、仮死分娩のため一日だけ保育器に入り、鼻孔栄養をうけました。1週間で退院し、自宅保育となりましたが、彼女にお乳をのませるのは、なかなかの大仕事でした。哺乳力が弱いこともあって、時間はかかるし量は少ないという状態で、生後1カ月の体重増加は標準の半分以下でした。その後も体重増加はかんばしくなかったため、私たちは娘の食事プランをいろいろ考えてみました。

◎哺乳びんの乳首の大きさをいろいろ変えてみる(生後1カ月半までは混合栄養で、その後は人工栄養)

◎ミルクの濃度を変化させる

◎ビタミン剤(ポボンS)の投与

◎果汁、野菜ジュースをたっぷり与える

◎離乳の問題…(ミルクに頼らずに生後4~5カ月から徐々にはじめる)

特に乳児期の具体的記録をみると、ひたすら娘にいかにして栄養を与えていくかという課題との悪戦苦闘という印象をぬぐいきれません。

体重増加は標準以下でしたが、ともかく離乳は順調にすすみ、レポートリーは広がっていきました。もしも、この期の栄養摂取量を計算できるとすると、これらが脳及び身体の発達にどの位の意味をもつものなのでしょう。ハンディキャップをもって生れてきた者が、更にその上に充分な栄養摂取ができないとすれば、もうそれは強烈なダブルパンチという他はありません。

#### 【主要な精神運動発達に関する記録】

##### ◀生後1カ月半～

○ とてもよく声を出し始めたので、その都度話かけると、また、声の反応がかえってくる(原始的なコミュニケーション)

○ 瞬間的だが首の坐りがよくなってきた

##### ◀生後2カ月

○ 娘の要求の多様化(ミルクをのんでいても、おしめがぬれると、のむのをやめてしまうし、ゲップを出してやらないといやがるし、さめてしまったミルクはとてもいやがる)

○ 笑いの反応が多くなり活発化

##### ◀生後3カ月

○ 市立病院で諸検査

大泉門の開きが大きいとの判断あり

##### ◀生後5カ月

○ 寝返りできるようになる

○ 赤ちゃん体操をはじめる(筋力強化のため)

○ 気候がよくなりはじめてから、早朝、父親が乳母車にのせ散歩に連れ出す。徐々に外にいくことを喜ぶようになる

##### ◀生後8カ月

○ 紙をもたせると、手足をつかって上手に破る

○ ソファでお坐りをさせると、坐ってられる時間がのびてきた

- おいでをされると、少し手を出す
- 手足の筋力をつけるため、足をピョンピョンさせたり、手に少しずつ重い玩具をもたせるようにする
- 人見知りと考えられる行動出現
- 眼鏡をとったり、髪の毛をひっぱる

#### ◀生後9カ月

- ワンワンと低い声を出して働きかけると、キャッキャッと声をたてて笑う
- イナイナイバーをされると、とてもよく笑う
- 赤ちゃん体操の時に、両足をもった状態で足のつっぱりを利用して前の物をとること可能
- 自分の力でお坐りが少しできる
- 洗たくざお、電線、屋根の縞目をみて喜ぶ
- 自分でおもちゃを動かして、その動きや音を楽しんでいる
- お坐りの時間がのび、背すじがグニャンとした感じからピンと張った感じになる
- 大人の感情の変化に敏感になり、ちょっとしたことで泣いたりする
- 前屈みになって物を取り、その状態から、お坐りの姿勢を維持できる
- 頭をぶつけた時に、眼があうと急に泣き出したりする
- はじめて歩行器にいれる（少し動くこと可能）
- ハイハイの姿勢で足を屈伸しはじめ、わずかに進む
- 畳の上で両手を高くつき、お腹ですべるように後ずさりする。前にも行こうと足をつっぱり出す
- 歯ごたえのある食物を喜ぶ（せんべい etc）

#### ◀生後10カ月

- 電気のひもをひっぱり on—off をくり返す
- 哺乳ビンをいやがりはじめ、コップで飲ますとスムーズに飲む
- 広告用紙や包装紙を喜ばなくなり、ティッシュペーパーを出しては破ることに執着

#### ◀生後11カ月

- ハイハイ訓練のため板にろうをぬり、これをわずかに傾けて娘をのせ四つんばいにさせる（スベリ台方式）
- 初の生歯（下の前歯）
- おつむてんてんを模倣する
- 歩行器にのり、両足をつっぱり後へ移動
- タタタタのような喃語様のおしゃべり出現
- たたみの上で後ずさりする
- 支えてやると両足でしっかりと立つ
- スベリ台で前向きにハイハイをする
- 喃語様の種類が豊かになる
- 腹ばいで回転しながら物を取る
- じゅうたんの上で母親の足めがけて、前にハイハイしはじめる（足の関節はつかわず腰をつかっている）

#### ◀生後1年

- 木琴を与えると、とても楽しそうにたたく
- ハイハイの時、少し足の関節をつかえる
- 歩行器にのった時の動きが前や横にも移動
- 床の上で両手をつっぱってお尻をもち上げている
- 名前を呼ぶと「アイ」と返事する
- 本の読み聞かせをしても楽しみにするようになってきた
- 自分で食べたがり、茶碗をかき回したり、欲しいものへの指示が激しい
- ハイハイは自由になり、スピードもある
- 歩行器の中でひんぱんに立っている
- 絵本をみる時に、大人の手をもって、本の頁をめくらせようとする
- 自分から、おつむてんてんをしたり、両手をパチパチとたたく

#### ◀1年1カ月

- “マンマ” という発語あり
- つかまり立ち
- 本等で自分の顔をかくして、イナイイナイパーをする
- 小さい木の玉を自分どころがして、追いかけて回す
- 動作で、ダッコ、オンブの要求ひんぱん
- “イタイイタイ” の発語あり

#### ◀1年2カ月

- 模倣行動が多くみられる（ブーとことばで働きかけるとブーと返ってくる，“カチカチ”とことばをかけると、玩具をもってきて打ちならしてみせる、顔の表情をまねする）
- “ワンワン” の発語あり
- 上の前歯1本出かかっている
- むすんでひらいての歌を歌うと、自分で手を打ち合わせて、それから大人の手をもって上にあげる
- ことばでの理解が増えはじめる（ワンワンはと問かけると、犬の玩具をもってくる）
- ドアの開閉に熱心
- 禁止に対して、大声をあげて怒ることあり
- “バイバイ” との、ことばでの働きかけに対しはじめて手を振ってみせる
- 4本目の生歯

#### ◀1年3カ月

- “アータン” の発語あり
- バンザイをする
- おマルにおしっこをさせるとできる
- ラッパを少し吹ける

#### ◀1年4カ月

- 声の模倣をさかんにする（ウーン、バー）
- 高い所によじのぼりたがる
- 5本目の生歯
- “カワイイ、カワイイ” と声をかけると、動作で頭をなでる

- “アッタ” の発語あり
- 電話が鳴ると “ハーイ” と返事をする
- コンニチワの動作（頭を下げる）できる
- 6本目の生歯
- 喃語の多様化（ウマウマ、イタイ、ラブラブ、アッブ、エンエン etc.）
- おもちゃを箱の中に出し入れして遊ぶ
- 積木もこわすことだけから、重ねはじめる
- 壁に片手でつかまり、長い間立っている
- 脱衣かごの中に入って遊ぶのが気に入る

#### ◀1年5カ月

- ベビーサークルの中の玩具を出せとか、積木をつめなどの動作要求が激しい
- 歩行器につかまって、2、3歩押し歩き
- 眠い時に、坐ボタンを二つに折ってマクラにする
- 手つきのコップで1人で牛乳飲む
- 母親にベッタリとくっつき甘える態度を示す（アーチャンアーチャンと呼びかける）
- お人形さんにキスをしたり、ひっぱり回したりして遊ぶ
- スプーンをもたせると、2、3口ごはんを食べるようになる
- ジュースのことを “ジュチュ” と発語
- バチをつかって、太鼓をたたく
- 音楽をきくと、両手を振って体をゆらせる（一見、指揮者風）
- “チョウダイ” という指示に応じられる
- 眼の指示できる
- はじめて公園に連れていき、ブランコとスベリ台にのせる
- “ウマーイ” の発語あり

#### ◀1年6カ月

- 上の奥歯2本（計8本の生歯）
- メリーポップ（レコードをならしながら、汽車が走る）をととても楽しむ
- ブランコが大好きになってくる
- 赤ちゃんの写真をみては、声をあげ喜び、チューをする
- 鏡の前で自分の身体や表情の変化を楽しむ
- なぐり書きをはじめる
- じーちゃん、とーちゃん、あばちゃん（おばちゃんの意）の発語あり。おしっここの時に “チャーチャー” という
- レゴは、はずすことできるがはめこめない
- 引戸、引出しをさかんにあける
- 必死の努力でレゴを少しはめこめる
- トイレで、はじめて便をする

#### ◀1年7カ月

- アチチとさかんにいう
- ぬいぐるみの馬にのせると、たづなをもって、しっかり乗る。パカパカといって体を動か

## し楽しむ

- 強く叱ると、下唇をつき出して泣き顔になったり、大声をあげて泣く
- 机の端から端までつたい歩き可能
- 階段をハイハイで2段登る
- 下の歯2本出る（計10本の生歯）
- クレヨンと画用紙を与えたところ、点々のようなものをさかんにうつ
- 握りこぶしの開閉、完全にできる

### ◀1年8カ月

- 積木を4つまで積める
- ストローをつかえるようになる
- はじめて海に連れていくと歓声をあげ、いつまでも波うちぎわに坐って、遊んでいる
- よく読み聞かせている本の簡単なものは、指示できる（キイロイコトリ etc.）
- いったん着せた洋服を脱がせようとするとき「イヤーダ、」という
- アカチャンのことをアカタンという

### ◀1年9カ月

- 両手・両足をつっぱって四つんばいから、立とうとする
- 太鼓のひもを自分の首にかける
- ブタの絵をみてブーブーという
- 「アー オイチイ、」の発語あり
- 両手をもって支えてやると少し歩く
- チージュ（チーズの意）の発語あり

### ◀1年10カ月（現在の住居に移転）

- 3階から5階までの階段を四つんばいで登る
- イヤ、イヤの連発
- 自転車のことを「ちりんちりん、」と表現
- 鉄棒にほんの少しぶらさがれる
- レコード（主に童謡）をきくことに熱中
- カタカタを押して歩く
- スプーンを10さじ位使える（こぼすのも多し）
- 絵本をみて、動物の種類の手指示増加
- エイショエイショとかけ声をかけて階段をよじ登る
- 歯みがきすることに慣れてきた。自分で歯ブラシをもってよくかじる

### ◀1年11カ月

- 名前を呼ぶとき「ハイ、」と返事する
- 「アーチャンはどこ？、」ときくと母親を指す
- ブタはブー、車はブーブー、汽車はポッポ、さよならはバーイと表現
- いざり歩きあり
- マンションの階段で遊んでいる時に、大きな声を出すので「シーッ、」と口に手をあてると自分もシーッという。その後は、意識的に大きな声を出しては、シーッといって、口に手を当てる

- 人形の目、口、鼻、耳が指示できる
- 絵本をみて「手」といえるし、自分の手も指示できる
- 「ついた」、 「出た」 という動詞がはっきりしてきた
- スリッパをさして「パッチイ」、ストーブをみて「アッチチ」という
- レコードの曲名をその歌詞の一部をとって表現(大きな栗の木の下で→イヤイヤ、おもちゃのチャチャチャ→チャチャ)

#### ◀2年

- 家、木、椅子の絵をみて、ウチ、キ、イスといえる
- バスを明瞭に言える
- 積木を5個まで積める
- デンワのことをブンワという
- 猿を見て、キャッキャッという
- 飛行機あそび(ブーンブーンといいながら)、紙鉄砲あそびをととも喜ぶ
- お風呂場で立ち上って手つきの桶でふろから湯をくむ

#### ◀2年1カ月

- 「子犬のクンクン」の本を見て、クンクンという。靴のことをクックという。(音の関連性があるのか)
- ババいた、いないいないいた(二語文)出現
- ボール遊びの時に「とって」ということば出現
- 食パンを見てパンパンという
- 積木は7個まで積み、バランスのとり方もうまくなり、自分でやり直しも可能
- 「カラスは何て泣くの」ときくと「アアア」と答える
- ラッパの絵をみて「パ」といい吹く動作をする
- 積木をおとしちゃってから「オチチャッタ」と言う

#### ◀2年2カ月

- フルーチェ、プリン、ヨーグルトのようなものは自分でスプーンで食べられる
- テレビ番組(サーカス、NHKの子供の広場を好む)
- 乗用自動車に自分でまたがって、ハンドルをまわすこと好き。特に人形をのせて押して歩く
- チョウチョコのことばあり
- 車をおしはじめる時に出発の意で「パツ」という
- ボール、バック、ひこうきのことば出現
- 絵本を指さし聞いて、相手に言わせる
- おしっこがでた時に「シーデタ」の表現
- キューピー人形を背中にまわして「バップ」という(オンブの意)
- 年齢に関する質問に対し「2つ」と答える

#### ◀2年3カ月

- 鏡に向かって、ネックチーフをかぶってポーズをとったり、百面相
- 自分で「立っち」といっては、つかまり立ちしてから、手を離して立って見せる
- 「パパダッコ」、 「デンキツイタ」の表現あり

- ダーイスキ、ケーキ、ステキ、キレイのことば出現
- 歌の部分をまねて歌おうとする（みかんの花、ハトポッポ等）
- スベリ台が大好きになる
- ふりまわしてもらったり乱暴なことを喜ぶ
- くつ下、ぼうし、シャツ、パンツのことばあり
- ゴミを拾ってきて「バッチイ」といって、母に渡しにくる
- 「イクヨ」と声をかけてボールを投げる
- 「ジュース飲む？」ときくと「飲む」と答える
- つかまらないうで、初めて自力で立ち上る

#### ◀2年5カ月

- 1～2歩、母親に向かって歩くことあり
- マメということば出現
- 食事時に、しいたけを出すと「ダーイスキ」を連発
- 「うしろのボールをとって」と話かけると「うしろ」といって振り返る
- こんにちはのことは「ニチワ」、ニワトリ、学校、圭子おばちゃんのは、みんな「ケッコー」と表現
- 自分の探しているものがないと「ナイナイ」という
- 単語（ボタン、タイヤ、花、プリン、うどん、かき、くし）の出現（明瞭にいえる）
- 「山だよ」と話かけると「ヤッホー」と答える
- 片手をひいてやるとしっかり歩ける
- 衣服をぬぐことを自分でやりたがる
- 鉄棒に数秒間、ぶらさがるのでブランブランさせてやるととても喜び、4、5回くり返す
- 帰宅すると、自分で帽子をとり、外とうをぬがせてくれと要求
- コリー犬を見て「ラッシー」という

※この時期からは単語が急速に増加しはじめる（これ以降は詳細には書き切れない）

#### ◀2年6カ月

- 書名をことばで指示する（「黄色いことり」→トリ、「ぐりとぐら」→ぐら、「おなかのかわ」→かわ）
- 自分で歩く意欲充分（歩いては、転びの連続）

#### ◀2年7カ月

- 鉄棒にぶらさがって、数回、体をスイングできる
- 「いらっしゃい」、「いってらっしゃい」のことば明瞭になる
- 母親が歌うと、そのあとをついて歌おうとする（カラスの赤ちゃん、キューピーちゃん、てんてんてまり等）
- 排便、排尿を教えはじめる
- 父親や母親の衣料品をみて、パパの、アーチャンのと区別していえる
- 「白いワンワン」、「白いニャンニャン」と修飾して言えるようになる
- さようなら、ごめんなさい、ごちそうさま等あいさつに関することばが、幼児語ではあるが言える

◀2年8カ月

- オウチ, カエルの2語文出現
- 坂道を上り下りすることが好き
- 何に対しても「イヤ」と言う(反抗的態度を示す)

◀2年9カ月

- 字に興味をもちはじめ指示して読ませる(拾い読みできる平仮名もいくつかあり)
- 子ネコの本等, よくなれた本の文章を読み手といっしょにしゃべろうとする
- ものをたずねる時に「コレは?」といって尋ねる
- 書名をことばで表現する範囲が増大(「ママ大好き」→ダイスキ, 「テングのコマ」→コマ, 「コレなあに」→ナアニ, 「ゴロゴロニャーン」→ゴゴニャーン)
- 2語文の増加(「オサカナ イタ」「オシッコ シチャッタ」「全部出た」「どこ行った」)
- 普通のブランコにゆれる状態で, 少し坐ってられる

◀2年10カ月

- 丸らしきものを描き始める
- 円, 三角, 四角の区別可能
- 平仮名の書名は少し読める(「きんたろう」, 「そらいろのたね」等)
- 数字1~10まで読め始める

◀2年11カ月

- すべり台は, どんなに高くても階段を上ってすべる事可能
- 色の識別可能なもの(白, 黒, 茶, 緑, 赤, 青, 黄)
- ボールけりを楽しむようになる

◀3年

- 人の名前やテレビの登場人物などの名前はややこしいものでもよく覚えている(現在でも人の名前を覚える力は抜群である)
- ハサミをもちたがるが, 紙を切るというよりもハサミの先をひっかけて紙を裂くという感じ
- 「たろうのおでかけ」の本を見ての娘のおしゃべり「ニャンニャンとワンワンをつれておでかけ」
- 「小さなねこ」の本を見ての娘のおしゃべり「キーキー車, あぶないよ」
- 眠る時に「もも太郎」や「かきじぞう」の話させがむ
- ボールをうけとることが少し可能

◀3年1カ月

- お人形遊び, 転がったり, とんだりすることが好き
- 折り紙に, のりをくっつけてはること好き
- 「欲しくない」「おもしろくない」とことばで表現
- 子供用トイレでさせてから, 自分でおしりのしまつをする
- 他児とまじわって遊ぶのを喜び始める

◀3年2カ月

- おふろからパパといっしょに出てきた娘に「おふろで何をしたの?」ときくと「アタマシャワー, キレイ, キュービさんキンギョといっしょ」と状況を説明する

- テレビのCMを模倣する

◀3年3カ月

- アルファベットのA, B, C, Dが読める
- 食卓の茶碗を下げて手伝いをする
- とみに、お気に入りの本の文章が娘の表現の中にみられるようになる
- 歌にあわせて、太鼓をたたいたりできる
- 衣服の着脱に意欲的

◀3年4カ月

- ベッタブロックは、やる気あり

◀3年5カ月

- 靴が上手にぬげる
- 歩く持続力ついてきた(歩けるようになってからは毎日、散歩に連れ出す)
- レコードを聞きながら、机の上で、紙になぐり書き
- 三輪車にまたがるが、ペダルはこげない
- 階段の上り下りは、手をつないだり壁につかまると可能

◀3年6カ月

- 知っているお姉ちゃんたちのあとをついて歩いたり、遊ぶのを模倣したりする
- "お目々を描いて、お口を描いて、"と言いながら絵をかくが、顔の形にはならない

◀3年7カ月

- しつけの面で怒ること多くなる
- 机の上からとび下りることを好む
- 自分からお友だちに対して "遊びに来て下さいね、" と話しかける
- "今日は何曜日?" と聞く。"水曜日 子供クラブ、" "土曜日 リズム、" と自分の行っている所の名称を言う
- 三語文出現(「アーチャン 切符もってきたよ」、「お母さん レコード終わったよ」等)

◀3年8カ月

- ネコの顔らしくみえるものを描く
- 衣服の着脱 パンツ、ズボンは脱げる。はく方は前ばかりを引っ張り上げて、後の方がおすになってしまう

◀3年9カ月

- 簡単なひもとおし、棒さし、シールはりができる
- ままごとに興味あり
- まとに向かってボールを投げるのが好き

◀3年10カ月

- 課題達成の時に、はめてやると自信をもつようで "もう1回する、" と主張する
- 茶わん洗いをやりたがる
- クッキーを食べてちらかすと、自分でホーキとちりとりをもって、そうじをする
- "ドレミファソ、" といいながら、おもちゃのオルガンをひく

◀3年11カ月

- カタカナの絵本に興味を示しはじめる

- 色の区別の範囲広がる（金、銀の区別可）

#### ◀4年

- カタカナ全部読める

- 本の読み方も拾い読みから、単語のまとまりをスムーズに読めるようになる

※この後、娘は体力的基盤を養って、生き生きと遊んでほしいと願う私共の方針にそって、あるオープンシステムの山の幼稚園に入園しました。就学ゆう予の1年間をいれて計3年間在園し、娘は自発性、行動力と表現される特性を得たと思います。この幼稚園は親の出入りも自由なため、全体に大きなファミリーという感じで、親も子も楽しい人間関係を得ることができました。娘は地域の普通の小学校に行き、そこでもいろいろなお友だちができ、本人もだんだんとお友だちとの関係を心から楽しめるようになっていきます。

次に私たちが娘に読みきかせた数々の絵本の主なものを資料として提出することにします。娘には、生後10カ月から、本を見せはじめ1歳すぎから積極的に量を増やしていきました。

#### 【絵本についての資料】

##### ◀生後1年前後

- モノクロやカラーの英語版の動物の写真集(犬と猫が主流)、写真の中にいろいろな表情やポーズであられる犬や猫に愛着を示し、写真がぼろぼろになるほど見ました
- ディック・ブルーナー作「子供がはじめて出会う本」これらもとてもお気に入りの本で、二歳すぎからこれらの本に関することばの出現が認められます。
- 保育絵本（食物・道具・動物に関して）コレナーニ式で教える時によく利用して、娘も積極的に指さしました

##### ◀2～3歳

- 福音館から出ている月刊「子どものとも」をとてもよく見ていました。とりわけお気に入りなのは、「大きなかぶ」、「ぐりとぐらのシリーズ」、「だるまちゃんのシリーズ」、「かさじぞう」それから、ことば遊びの「つつみがみつ」、さいごに「ゆうちゃんのミキサー車」この本は、ミキサー車がソフトクリームを作るお話で、とても楽しく、この中の文章はメロディをつけて歌うまでになりました
- 外出する時に愛用した小さなピクシー絵本のシリーズ
- 三びきのやぎのがらがらどん
- 字そのものに関する本（平仮名、カタカナ、数字、アルファベット）
- クマのプーさん
- ノンタンシリーズ（絵本の専門家からは情緒不安定の線であると批判された本ですが、この悪さをするノンタンのみよくは娘にとって特別だったようです）

##### ◀4歳

- 清水みちお作「ちいちゃんシリーズ」
- 子供のとも傑作集 林明子作「はじめてのおつかい」これは半年間もの間、毎日何回かは熱中していたものです。この話は、はじめて、ひとりでおつかいに行く女の子のドキドキの様子がとてもよく描かれており、この子と感情体験を共有しているのではと思う程、執着していました
- カロリーヌのシリーズ（講談社 世界の童話）フランス人のカロリーヌという女の子が友

だちの動物たちとくり広げる物語で、絵そのものは古めかしい感じもうけますが、一場面一場面がていねいに楽しくかかれています。この本は、娘が年齢とともにその場面の中に、新たな発見をする絵本でもありました。

- 加子里子作 ことばのべんきょう（くまちゃん絵本シリーズ）
- 長崎源之助作 小さい絵本シリーズ（豚の家族がくり広げるお話）
- いもとよう子作の絵本もその絵の感じがとても可愛らしく優しいせいでしょうか、何冊も見えておりました。

※この頃より、娘は書店や図書館に行き、自分の選択権を強く主張し、今、好きな著者の他の本を探し出してきて求め、それがひとつお読み終えたと、別の著者あるいはシリーズものを自分で探し出してくることに終始していました。

- 山本まつ子作の絵本（はじめてのおるすばん、みほちゃんのクリスマス、看ご婦さん等）
- 渡辺茂男作のくまたくんのシリーズ

#### ◀5, 6歳

- ラッセル・ホーバン作 あらいぐまのフランシスのシリーズ
- ベリィストロム作 アルフォンスのシリーズ
- リンドグリーン作「ぼくの赤ちゃん」, 「わたしも学校へ行きたいわ」

#### ◀6~7歳

- 学校生活がはじまってからは必然的に学校を舞台にしたお話を選び出し、中でもとても気に入ったのは、小学館子供文庫のおはなし1年1組のシリーズです
- おばけや怪獣の話に興味を示しはじめ、なかでも木村泰子作のぱっくんおおかみのシリーズと角野栄子作のおばけのアッチ、コッチ、ソッチのシリーズはとても喜びました
- 日本や外国の昔話に再び興味を示しはじめ、同一のタイトルでも再話のあり方によって話の内容の異なるものを飽きもせず要求されます。（もも太郎、かちかち山、さるかに合戦、3ひきの子ぶた、7ひきの子やぎとおおかみ、赤ずきん等）

#### ◀8歳~

- 前川かずお作 うさぎのとっぴんシリーズ
- 科学的な本への興味の範囲はやや狭いですが、フレーベル館のしぜんのシリーズや福音館の「科学の友」はいくらか見るようです。なかでも「じゃんけん」, 「かげ」, 「おなら」の本はお気に入りです。
- 灰谷健次郎作（いえでぼうや、ふたりはふたり等）

以上が娘とのかかわりをもった本の概要です。4歳までの間に娘に読みきかせた数々の本が、言語生活をとても豊かにし、本好きの子供の基盤を作ったと考えられます。絵本の読みきかせのための条件や娘の本への対応について少しとりあげてみたいと思います。1歳少し前から見せはじめた写真集では、犬や猫にもっぱら関心があり、他の鳥や馬等の写真をみせてもほとんど関心を示しませんでした。とりわけ子猫や子犬の写真に夢中でした。何故、猫と犬にのみ興味があるかと考えてみますと、具体的経験にもとづくと思われるからです。父親が、生後5~6カ月から早朝乳母車にのせ散歩に連れ出し、もっぱら犬や猫のいるところをみて回ったり、接触させたりという内容を含んでいるからです。

娘は、単なる写真集からストーリー性のある写真絵本に熱中しはじめ、とりわけ「ズッケロとカピートに子猫が生まれた」という本は、ボロボロになる程みました。この時期では、娘は私

たちのひざの上に抱かれながら即興の説明を聞いたり、お気に入りの写真をあきるまでながめていたものでした。娘の本のレパトリーはどんどん広がっていきますが、とくに本とのつき合いのはじめのころは、1冊の本をまるごと全部、順序よくみるわけではなく特定のお気に入りの場面のみをみたり、気に入った表現のみをくり返して読むように要求していました。

その代表的なものは「クマのプーさん」と、加子里子作の「ダルマちゃんとおてんぐちゃん」、  
「ダルマちゃんとかみなりちゃん」等です。「クマのプーさん」では、プーさんが、はちみつをとり木に登っていき、そこではちに攻撃され、木から落っこちていく場面があります。このおちていく場面の読み手の表現がよほどおもしろかったらしく、さかんにリクエストされました。「ダルマちゃんとおてんぐちゃん」では、だるまちゃんが、「びよんとこさととびあがる」場面が好きで、「ダルマちゃんとかみなりちゃん」では「かみなりちゃんが、ピカピカガラガラゴロゴロシーン」とおちる場面に執着しました。

これらの場面は言葉の擬音語的おもしろさを伴うもので、リズムカルなことばと解釈されます。また、ある種の絵本専門家からは、品が悪いと不評の「ノントンシリーズ」ですが、この本もことばのひびきのおもしろさとか、子供にとって魅力的な汚ないことばが、いっぱいつまっているように思います。例えば「でんでらでんでらお日様かくせ」とか「アッカンペーのペロリンタン」等の表現です。

娘の成長記録をみますと、確実に平仮名を読みはじめたのが2歳9カ月です。これは、ごく普通の発達の子供の状態としても、比較的早い時期と考えてよいと思います。私たちは意識的に読字を早めようと思って働きかけたわけではありません。しかし数多くの本の読みかぜの副産物として読字行動があったと考えております。いったい字が読めるための条件は何なのでしょう。書かれている文字は、ただ提示されただけでは、何やら形のいろいろあるものとの認識にしかすぎないかもしれません。

文字は、ある音と対応するという一致があってはじめて、字を読もうとする動機づけが成立するわけです。このことに気づかせるためにはどうしたらよいのでしょうか。娘の場合を考えてみますと、それに気づいたのは保育絵本「ねこ」であったように思います。この本は、ごく単純なかわいらしいネコの絵に、ほんの短い説明がつけられています。この本も100回以上も読まされたように思います。そのうちに娘は、読み手といっしょに声を出して読もうとするようになり、これは字を読み出した時期と一致します。おそらくは1コの文字(ひらがな)に1コの音が対応することがわかったようです。また読み手の方も1コ1コの文字を指さしながらゆくり読んでやることも時には必要です。

いったん平仮名が読めるようになると数字、カタカナも急速に読めるようになり、漢字も読む方は、1回教えると楽に読めるようで、文字の読みの成立は、かるた遊びの熱中へともつながっていきました。

4歳まではひたすら読まされる一方でしたが、やがてなれた本なら一人で読めるようになり、6~7歳になってくると新しい本でもはじめから一人読みが可能な状態となりました。娘のこのころの世界に本がどのような役割を果たしているかといいますと、疲れた時、またいやなことがあった時などは、ときめんに本の世界に入ろうとします。おそらくは本の世界に「心の安定」を求める程に、定着しているようです。本から記憶された具体的概念が、適切な場面につかわれることは、前記の通りですが、障害児の場合、従来、成り立ちにくいとされてきた抽象概念についても、同じ経過をたどることが娘の場合に認められます。

その一つは「ロマンティックな」という概念で、これも本から得たものです。これは、はじめは父親と二人きりで散歩に出た時、父親にびったり寄り添って、「ロマンティックね」と発したわけです。次第に、母親と外出した時でも夜の雪景色をみながら、あるいは月や星をみながら「ロマンティックな」といいはじめました。

もう一つの例は「人生はよいもんだ」という表現です。この表現は父親のことばから、得たものですがとても楽しい一日を経験したあとなどで、「人生はよいもんだ」といい出しました。このような娘の表現に周囲は驚き、強い反応を示します。これらが、益々娘の言語表現を強化していくようです。

絵本については、娘は自力で積極的に選択し、今までは快進撃を続けてきたといっても過言ではないと思います。しかし小学2年生の今になって、ある種の本のまわりをどうどう巡りする感じで前進できないという印象をうけています。その最大の原因は、日本の児童文学の中身にかかわってくる気が致します。学年がすすむにつれての日本の児童文学の内容が、相手の心の動きをやたらと読みとろうとする内面世界についての文章表現が多すぎます。これらに、娘はあまり興味を示さないようです。

私は、ドロシー・バトラー夫人が強調する「人間が最も人間たる言語」を引き出すことこそ障害児教育の最大の課題と考えております。言語があることによって、生活習慣の自立もよりスムーズになります。私たちが娘に対して貫いてきた方針は、「人間関係を豊かにすること」と「言語生活を豊かにすること」に尽きると思います。

#### 参 考 文 献

- ① クシュラの奇跡—140冊の絵本との日々—ドロシー・バトラー著（百々佑利子訳）のら社
- ② ナイジェル・ハントの世界・ダウン症の青年の手記—ナイジェル・ハント著（中村訳）偕成社